

地元に投じる一石としての「あんしんノート」

二ツ井ふくし会による在宅での看取りの事例集は地元になにをもたらすか？

相澤出（医療法人社団爽秋会）

現在、全国的に、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。医療と福祉を総合化し、地域内の医療・介護・福祉の関係諸機関と行政、さらには地域住民が参画して、このシステムを創ることが目指されている。この地域包括ケアの主要な論点のひとつが、病院の外、生活の場で看取りまで実現する地域内の体制づくりである。地域のなかで看取りまで実現する地域包括ケアシステムの構築は、医療・福祉政策上の課題として推進されている。しかし、医療・福祉の担い手や社会資源、社会的環境のあり方は一様ではない。それゆえ、地域包括ケアシステムの具体的なデザインは、市町村レベルで、地方自治体ごとになされるべきものとされている。全国一律ではなく、各地域の実情やニーズにあわせるかたちで、地方自治体ごとに独自のシステム構築が求められている。

政策によって推進されるがゆえに、システムづくりに関しては、行政が主導的な役割を担っている場合が多い。しかし、先行事例などをみると、地域住民が主導するもの、地域の医療・介護・福祉の専門職が主導するものなど、多様な事例も認められる。実際、厚生労働省が、地域包括ケアシステムの事例集にあげるものには、行政主導のものに限らず、民間主導、専門職主導の多彩な取り組みが含まれている。

さらに、地方自治体レベルでのシステム構築ではないものの、実際の医療・介護・福祉の連携がなされるところである「小地域」（具体的には中学校区や平成の自治体合併以前の旧市町村といった、より小さい範囲）のなかに、有名無名の興味深い動向が見出されることがある。すなわち、患者ごと、症例ごとのミクロレベルでの地域内連携や地元のニーズに端を発した、興味深い取り組みである。

本報告で取り上げる事例の所在地、秋田県能代市二ツ井町もまた、平成の自治体合併において、隣接する能代市と合併したところである。検討する事例は、この旧二ツ井町域における看取りのケアをめぐる、社会福祉法人二ツ井ふくし会の取り組みである。二ツ井ふくし会は、合併以前の旧町時代（1995年）に、町の高齢化に備えて設立された社会福祉法人である。旧町域で初めて特別養護老人ホーム（50床）を開設する一方、在宅での介護を支援するために、ショートステイ（12床）やデイサービス、訪問介護事業所、介護支援事業所などの諸部門を構え、施設、自宅両面で総合的に旧町域の介護を担ってきた。さらに後には、地域包括支援センターの運営を委託されるなど、狭義の介護に限

定されることなく、幅広く地域との接点をもちながら、ケアを実践している。

この二ツ井ふくし会が近年、最も力を入れているのが、看取りのケアである。特別養護老人ホームでの看取りを手がけるだけでなく、自宅で療養する人にも、希望があれば積極的に、地元の開業医など医療機関や他法人などと連携して、自宅での看取りを支援している。

ただし、旧二ツ井町域での、生活の場での看取りの推進は容易ではない。この実践は、創意工夫を伴いながらの、漸進的なもので、今も継続中である。この旧二ツ井町域を含む能代市（ひいては秋田県）は、病院死亡率が全国平均に比べても高く、いわば「死の医療化」が根深い地域もある。地域内では、人が病院で最期を迎えることが自明視されており、強固な常識と化している。たとえ専門職の目から、自宅看取りが可能なケースと判断されたとしても、いざとなると家族や親族が救急車を呼んで病院へと搬送してしまうなど、結果的に自宅での看取りが断念されるケースが後を絶たなかったという。

そこで二ツ井ふくし会は、ケアの体制を充実させるだけでなく、地元住民のなかに存在する常識、自明視されている病院死という死のあり方を変えようとする戦略をとる。つまり、地元の地域文化の現状を変える働きかけである。その取り組みの一つが、「あんしんノート」の作成である。あんしんノートは、二ツ井ふくし会の職員の手による、地元向けに自主作成された「エンディングノート」である。エンディングノートの存在が、今ほど社会的に浸透していなかった2014年に、あんしんノートの初版は作成、配布されている。2018年には増補改訂版が出されている。このあんしんノートが、一般的のエンディングノートと一線を画するのは、地元での在宅療養、看取りの事例集がある点にある。この事例集は、文字通り地元の出来事であり、現実性を帯びた身近なものである。胃瘻の事例、自宅で介護する家族の負担や悩み、自宅や特別養護老人ホームでの穏やかな看取りなど、地元住民の関心を広くひく諸事例が掲載されている。これらの事例は、在宅療養の負担への具体的な支援のあり方を示しつつ、地元で人生を全うすることを可能にする多様な選択肢がいくつもありうることを伝えている。このあんしんノートは、地域包括支援センターが企画する講座や、地域側から開催が希望される勉強会などでも、教材として活用されている。こうした地元に投じられた一石が、日々のケアの実践、実績と両輪をなして、地域住民の看取りに対する態度を、少しづつ変えつつある。

キーワード　あんしんノート　看取り　在宅ケア　地域包括ケアシステム　地元